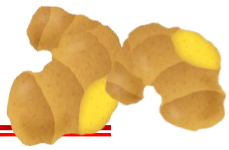
【ver. 2025.2.15】

サンビオティック農業で大豊作！

しょうが（生姜）・みょうが　栽培基準



◆本圃◆

時期	ステージ	商品名	10a施用量・倍率	施用方法	備　考
2～3月	土づくり	有機石灰等	100～200kg	土壌混和	あらかじめ土壌分析に基づきpHを矯正します。有機石灰や転炉スラグ等でpHを矯正し、最適pH 5.5～6.0を目標に矯正します。生姜はケイ酸を好むため、スラグ肥料や、ケイ酸カルシウムなどはお勧めです。
		バーク堆肥等	2～3トン	土壌混和	植物性主体の良質なバーク堆肥等2～3トン、なければ五穀堆肥50袋／10aを使用します。畜産堆肥であれば、牛糞堆肥や馬糞堆肥なら1～2トン、鶏糞堆肥や豚糞堆肥なら500kg程度。堆肥の上に菌力アップ5Lを適宜希釈して散布し、全体に混和します。そのまま1か月程度寝かせます。
		菌力アップ	5～10リットル	散布（潅水）	堆肥と一緒に菌力アップ5～10リットル/10a（100～200倍程度に希釈）をまんべんなく散布し、土壌混和します。連作圃場、前作で病害発生の園地、未熟堆肥使用圃場では、菌力アップ10リットルを推奨します。
	元肥	有機百倍、又は マッスルモンスター 鈴成 （硫酸苦土肥料）	10袋（200kg） 10袋（200kg） 1～2袋（20～40kg）	土壌混和	定植2週間前までに土壌混和します。必要に応じて苦土肥料を加えます。苦土は、ク溶性の水酸化マグネシウム（20kg程度）でも良いです。特に、堆肥を多く投入してきた圃場や、窒素過多の圃場では、苦土は品質向上、病害予防にもなるので、施用を検討します。
	土壌消毒	菌力アップ	10リットル	散布（潅水）	土壌消毒で微生物が非常に少なくなった状態から、速やかに有用微生物を増やすことが最も大切です。土壌消毒後に、菌力アップ10リットルを畑に満遍なく散布できる水量（適宜）で希釈し、散布、潅水します。
4月 定植期	種生姜の消毒	（温湯消毒の場合） 菌力アップ	菌力アップ100～200倍希釈	温湯消毒 50℃10分程度	温湯消毒を行う場合は、菌力アップを利用できます。純正木酢液500～1000倍でも、静菌作用があります。
5月 一次茎発生期	発芽後	菌力アップ 糖力アップ マジ鉄	100倍希釈 200倍希釈 5000倍希釈	株元潅水 7日～10日おき 2～3回以上	発芽し始めたら、週1回程度のペースで菌力アップ、糖力アップを株元潅水し、発根と初期生育を促進します。株当たり200～300ccほど、たっぷり与える。マジ鉄を混用するとさらに良いです。敷きわらを行い、土壌環境の安定と、微生物の定着を図ります。
6～7月 萌芽・分げつ期	生長促進 土壌改良	菌力アップ	10リットル	潅水（全面散布） 土寄せのたび	土寄せ（土入れ・培土）の2～3日前に、圃場全体に菌力アップを散布し、病原菌の静菌を図り、その後追肥し、土寄せします。土寄せ後に施用する場合は、畝に染みこむように、たっぷりと潅水します。
	追肥	有機百倍 硫酸加里肥料	4～5袋（100kg） 1袋（20kg）	株元または、通路に施用して培土する	追肥を3回に分ける場合は、5月下旬、6月中旬、7月上旬で、2:2:1の割合で施用します。追肥を2回に分ける場合は、6月中旬、7月上旬で、3:2の割合で施用します。 梅雨明け以降特に乾燥し、地温が高くなりやすいので、さらに敷きわらをしっかり行い、乾燥と高温を避けます。
8～11月 分げつ期、根茎肥大期、収穫期	収量アップ	菌力アップ 糖力アップ マジ鉄	5リットル 5kg 100～200g	潅水（水量適宜）3～4回	さらに収量を伸ばしたい方、生育が芳しくない場合、または台風や害虫等で被害があった場合は、特に実施すると良いです。
	土壌病害の予防・対応	菌力アップ 本気Ca 本格にがり	10リットル 2kg 1～2リットル	潅水（水1トン） 3日おき4回以上	根茎腐敗病、立枯病、青枯病、いもちは、必ず初期症状で発見し対応します。殺菌剤等を使用したのち、菌力アップ、本気Ca（マジカル）で病害の蔓延・拡大のリスクに対応します。本格にがりを加用するとさらに良いです。（ハウスの場合は、EC値が高い場合は本格にがりの使用は控えます。）病害発生を予防したい場合は、各半分量で、7日おきに継続します。
	高温・乾燥対策	イーオス タスケルプ！	200倍希釈 2000倍希釈	葉面散布、または潅水（随時）	梅雨明け後など、急激な高温や乾燥条件になると、病害の発生や生育不良などを招きやすくなります。梅雨明けや夏場の猛暑対策として、猛暑日の前日の夕方～当日の早朝に実施します。2～3日間、高温・乾燥ストレスを和らげます。
	品質向上、貯蔵性向上、病害虫の対応	本気Ca 本格にがり 純正木酢液	1000倍希釈 1000倍希釈 1000倍希釈	葉面散布、または潅水 3～4回	カルシウムやにがり、木酢液により、細胞壁や繊維を強化し、内容を充実させます。栄養価や風味の向上、貯蔵性の向上には潅水、病害虫の予防には葉面散布がお勧めです。 コーソゴールド500倍を混用しても良いです。
水害・湿害発生時	応急対策	酸素供給材 菌力アップ	規定量 10リットル	潅水 潅水2回	大雨水害等により冠水した場合は、MOXなどの酸素供給材を速やかに潅水し、翌日菌力アップ10L（50倍希釈）で潅水する。3日後、再度菌力アップ10L（50倍希釈）を潅水する。
収穫後	残渣処理	菌力アップ	10リットル	全面散布	翌年も生姜を栽培する場合は、残渣処理を促進することにより、白星病などの病原菌の持ち越しを防ぎます。フスマや米ぬかなど200～300kgと菌力アップを散布し、すき込みます。

※暖地の露地栽培体系のモデルです。地域、作型によって、時期が異りますので、生育ステージで判断してください。

※地力が十分にある圃場では、元肥の有機百倍（マッスルモンスター）を半分、もしくはそれ以上減肥します。

※可能であれば、土壌診断を実施し、データに基づいて施肥設計を行うことをお勧めします。品種や土壌条件等によって、施肥量は加減してください。